

# 般若經における書写

鈴木 健太

## 1. はじめに

いわゆる伝統仏教においては、ある時期に經典の編纂作業は閉じ、その經文に対する解釈は注釈書や論書の中で示されていくようになったことが指摘されている<sup>1)</sup>。一方、大乘經典、とりわけ般若經の場合、經典の編纂作業は閉じることなく、1000年以上の長きにわたり続いていったと考えられている。なぜ、般若經においては經典の編纂作業が閉じることがなかったのか、本小論は、その理由の一端を『八千頌般若經』（以下、『八千頌』）の記述に求めるものである。

般若經の登場以降、しばらくの間は注釈書類が作成されず、經典がその解釈内容をも取り込み、經典じたいが拡大していった。問題は、般若經に対する注釈書等が作られるようになり、解釈を經典の外で示すことが可能になった後も、經典の編纂が続いたことにある。

たとえば、般若經の綱要書である『現觀莊嚴論』が成立した後も、『現觀莊嚴論』の影響を受けて改変された經文が登場した。また、アーリヤ・ヴィムクティセーナが『二万五千頌般若經』（以下、『二万五千頌』）の注釈書を作成した後も、それを受けて『八千頌』の改変がなされるなど、般若經の編纂作業は閉じることにはなかった<sup>2)</sup>。

なぜ、伝統仏教のように、注釈書が作成されるようになった段階で、般若經の編纂作業は閉じなかったのか。この問いに答えるためには、『現觀莊嚴論』が登場したときや、アーリヤ・ヴィムクティセーナが注釈書を作成したときには、もうすでに書写された般若經が広く流布してしまっていたという状況を、まずは考えなくてはならない。かりに、ある程度組織的に本文確定作業をしようとしても、どうしてもその影響外にある經典というものが残ってしまい、般若經の編纂作業をすべて閉じることとは状況的に無理だった。このように考えることができる。

しかし、それだけでは、すべてを説明したことにはならない、というのも、上述のように、經典の編纂が閉じていることを前提としている綱要書や注釈書の記述をもとに、さらに經典の編纂活動が続くという動きがあったということは、編纂を閉じようとする流れの影響下にあった者たちの中にも編纂活動を止めなかった者がいたことを意味するからである。

『現觀莊嚴論』の影響による『八千頌』の經文の改変も、そうした編纂活動の一つである。『二万五千頌』に基づいて作成された『現觀莊嚴論』と『八千頌』の内容上の乖離を埋めるために、『八千頌』の經文を改めざるを得なかったと考えられている<sup>3)</sup>。たしかに、それは一理あるかもしれない。ただし、ラトナーカラシャーナンティが『最上心髓』(Sāratamā)の中で示したように、『現觀莊嚴論』と『八千頌』の間に内容上の相違があるときに、經文ではなく『現觀莊嚴論』を改変するという選択肢もありえたはずである<sup>4)</sup>。では、なぜそうしたことをせずに、『八千頌』の編纂がなされつづけたのか、やはり、經典の記述にそれを許す要因があったのではないだろうか。

## 2. 書写する者に対する評価

まず、編纂活動を閉じることを難しくした、經典の流布という状況を許した經典の記述を確認しておきたい。般若経が書写を勧め、その様々な利点を説いていることは、既に諸研究が指摘しているが<sup>5)</sup>、本節と次節では、特に流布との関連という観点から『八千頌』における書写の勧め方の特徴について論じていきたい。

『八千頌』は、書写した經卷の供養による現世利益を説く一方<sup>6)</sup>、次のように、書写する者がさとり近づいている者であることも説いている。

### ①『八千頌』第10章より

世尊は言った、

「シャーリプトラよ、そこ、北方において、北の地域において、甚深なこの般若波羅蜜を聞いて、この般若波羅蜜について実践をなすであろう者たち、その者たちが広めることをなすでしょう。シャーリプトラよ、この般若波羅蜜を聞き、書写し、習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦し、真実に向かって学び、真実に向かって修行し、真実に向かって実践をなすであろう者たち、その者たちは久しく乘に進み入った(cirayānasamprasthita)菩薩摩訶薩である、と知られるべきです。」(ASP 488.19-27)

ここでは般若経を書写し、読誦し、かつ真実に向かって学ぶ者は、「久しく乗

に進み入った」者であると評価されている。では、この評価は、どの程度高いものなのか。『八千頌』の他の箇所における、「久しく乗に進み入った者」についての記述を確認しておきたい。

## ②『八千頌』第10章より

このように言われて、尊者シャーリプトラは世尊に次のように言った。

「世尊よ、甚深な般若波羅蜜は、不退転の、授記された菩薩摩訶薩の面前で説かれるべきです。それはなぜでしょうか。世尊よ、彼はためらわず、疑わず、迷わず、そしらないだらうからです。」

すると、神々の主シャクラは尊者シャーリプトラに次のように言った。

「聖者シャーリプトラよ、しかし、もし、授記されていない菩薩摩訶薩の面前で、この般若波羅蜜が説かれるならば、いかなる過ちが生じるのですか。」

このように言われて、尊者シャーリプトラは神々の主シャクラに次のように言った。

「カウシカよ、たとえ授記されていなくとも、見て、敬い、仕え、聞くためにこの般若波羅蜜を得て、聞いた後も、驚かず、恐れず、恐怖に陥らないであろう菩薩摩訶薩、そのような菩薩摩訶薩は、遠くからやって来た者であると知られるべきです。カウシカよ、彼は久しく乗に進み入った、善根の熟した菩薩摩訶薩であると知られるべきです。いまや彼は、遠からずして、無上正等覚への授記を得るでしょう。彼に対する授記は近いと知られるべきです。……」(ASP 466.18-467.20)

このように、「久しく乗に進み入った」者というのは、もうすぐ授記されて「不退転」に到達するような、修行が進んだ者のことを言う。実は、『八千頌』では①のように書写を評価する場面で、書写等をする善男子善女人を「不退転」とせず、「久しく乗に進み入った」と表現することが少なくない。

一般的に、目標に到達した状況よりも、目標の到達直前の状況の方が、そのための努力に対する意欲が高まるということは想像に難くない。この場合も、近づいているが、まだ「不退転」に到達していないとすることで、書写する者の意欲をいっそう高めることを促していると考えられる。

## 3. 経巻崇拜よりも大切なこと

書写された経巻は現世利益をもたらし、読誦や書写をすることは、それだけで修行がかなりの程度進んでいるあかしであることが示されていた。たしかに、それらの經典記述は人々の意欲を高め、經典を書写すること、たくさん書写することを促したかもしれない。しかし、これだけでは、書写されたものが広く流布することには、必ずしもつながらない。たくさん書写した経巻を、自分の家や、自分の手の届くところに大切にしまっておくということも考えられるからである。

流布を促すには、別の何かが必要である。こうした問題意識に立った場合、経巻崇拝よりも大切なことを示す次の一節が重要な意味をもつことに気づくことになる。

### ③『八千頌』第5章より

すると、神々の主シャクラは世尊に次のように言った。

「世尊よ、善男子あるいは善女人が〔般若波羅蜜を〕信じ、信仰し、傾倒して心が清らになり、さとりに向けて心を発して、強い意志によってこの般若波羅蜜を聞き、習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦し、また他の者たちのために詳しく解説するとしましよう。……〔般若波羅蜜を〕ただ書物になったものにして保ち、安置するとしましよう。……様々な種類の供養によって、自分で、この般若波羅蜜を恭敬し、尊重し、尊敬し、供養し、讃嘆し、敬うとしましよう。

他方、別の者がいて、〔般若波羅蜜を〕供養し、ただ書物になったものにしてから、〔それを〕求め、欲し、請う、他の善男子あるいは善女人に〔それを〕与え、渡し、譲り、喜捨するとしましよう。世尊よ、これら両者の善男子あるいは善女人のなかで、どちらがより多くの福德を得るでしょうか。喜捨の心をもつ者でしょうか、それとも喜捨の心をもたない者でしょうか。」……

世尊は言った。

「……カウシカよ、これら両者の善男子あるいは善女人のなかで、他者を助けることをなす、喜捨の心をもった善男子あるいは善女人の方が、それにより、より多くの福德を得るのです。」（ASP 285.3-287.21）

ここでは、経巻崇拝よりも、経巻の喜捨による福德の方が大きいことが示されている。自らが崇拝するための経巻を書写するというのであれば、それほど繰り返し返して書写する必要はないかもしれない。しかし、他者に与える方が良いとなると、話は変わってくる。このように経巻の喜捨を高く評価していることは、経典の記述の中で最も経巻の流布につながりうるものであったと考えられる<sup>7)</sup>。

## 4. 経文が増える（経文を増やす）ことを容認する記述

「大乘経典では経典じたいが拡大しつづける」というのが一般的な大乘経典の特徴ではあるが、なかでも般若経は、その度合いが強い経典群としてよく知られている。般若経では書写が勧められているのだが、なぜ、ただ書くだけでなく、（一般的には言葉が増える方向で）書き換えることが容認されたのか。実は、それを容認、あるいは促す記述が『八千頌』にはある。一つは、般若経の経文を一語も減らしてはいけないという趣旨の次の記述である。

## ④『八千頌』第28章より

このように言われて、世尊は尊者アーナンダに次のように言った。

「……アーナンダよ、般若波羅蜜はさておき、もし、私によって直接説かれた〔その他の〕教え、そのすべての教説を習ってから、ふたたび失くしてしまい、ふたたび捨ててしまい、忘れてしまったとしても、アーナンダよ、それだけのことで、あなたは私にそむいたことにはならないでしょう。しかし、アーナンダよ、あなたが般若波羅蜜に関係のある語や語と結びついたものを失くしてしまい、捨ててしまい、忘れてしまうのならば、アーナンダよ、それだけで、あなたは私にそむいていることになり、あなたは私の心を喜ばせないでしょう。」（ASP 866.6-869.21）

これは、一見したところ、経文の変更を戒める記述のように思われるかもしれない。しかし、よくよく見ると、一つの語を亡失してはいけないとは述べられているが、増やしてはいけないとは述べられていない。

もうひとつは、般若経は量的に制約されていないという趣旨の次の記述である。

## ⑤『八千頌』第28章より

すると、世尊は尊者アーナンダに言った。

「……さらに、また、アーナンダよ、名詞の集まり、語の集まり、文字の集まりは、量（pramāṇa）とむすびついているのですが、アーナンダよ、この般若波羅蜜は量とむすびついていないのです。それはなぜでしょうか。アーナンダよ、般若波羅蜜は名詞の集まり、語の集まり、文字の集まりではないし、アーナンダよ、般若波羅蜜は量をもつものでなく、アーナンダよ、般若波羅蜜は無量だからです。」（ASP 875.16-878.5）

恐らく、この経文の本来、意味するところは、般若波羅蜜（般若経）は文字で表現されているから、その文字の文量によって限定されていると思われるかもしれないが、そのような特徴をもつものとして捉えてはいけないというようなことだろう。しかし、「般若経は無量」というのを、書写する者が「文字数がいくら増えても問題ない」と捉えてしまうことも考えられる。もし、そう捉えられるのだとすると、これも経文の変更、増加を容認する経典自身の記述ということになる。

## 5. おわりに

以上、般若経の経典編纂活動が長らく続き、とりわけ注釈書が作成されるようになって以降も、その編纂が閉じなかった理由の一端を、経典の記述にさぐってきた。『八千頌』は書写を高く評価し、書写する者を不退転の一步手前に位置づ

けることで、書写をより促していた。また、書写した経巻を他者に与えることを、経巻崇拜よりも高く評価していたことも書写經典の流布に繋がりうる經典内部の要因であったと考えられる。さらに、經典が經文を増やすことを禁じていなかったこと、また、般若経は無量であると説いていたことも、經文の増広を許容した般若経内部の要因であったと考えられる。

ただし、こうした經典の記述だけを理由として、實際の経巻流布、經典編纂がなされていたわけではないだろう。たとえば、『現觀莊嚴論』と『八千頌』の内容上の乖離という状況がなければ、注釈書が作成されるようになって以降も、『八千頌』の經文が改変されるに至らなかったかもしれない。あるいは經典の増広を促す何らかの社会的要因が他にあったかもしれない。そうした經典の記述以外の要因については、稿を改めて論じられるべき課題となる。

- 
- 1) 下田 (2011, 54) 参照。 2) 庄司 (2016, 300) 参照。 3) 庄司 (2016, 256–290) によれば、12世紀の注釈書『世尊母随順』は、『八千頌』の中に『現觀莊嚴論』と関連付けるために經文が付加されたものがあることを指摘している。 4) Jaini (1972, 274–279) 参照。 5) 朝山 1989 など。 6) ASP 250.9–24 など。 7) 朝山 (1992, 62) でも、他者に経巻を与えることを勧めることが經典の普及に寄与したと論じられているが、経巻崇拜と経巻喜捨の意味合いの違いについては十分な注意が払われていない。

#### 〈略号表〉

ASP *Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā, Abhisamayālaṃkāraḥ Prajñāpāramitāvākyāḥ: The Work of Haribhadra*. Ed. U. Wogihara. Tokyo: Tōyō Bunko, 1932–35.

#### 〈参考文献〉

- 朝山一玄 1989 「初期大乘經典における「書写」について」『印度学仏教学研究』38(1): 308–311.  
 ——— 1992 「大乘經典の宣布に関する一考察」『東海仏教』37: 59–68.  
 下田正弘 2011 「經典を創出する——大乘世界の出現——」『大乘仏教の誕生』シリーズ大乘仏教2, 春秋社, 37–71.  
 庄司史生 2016 『八千頌般若経の形成史的研究』山喜房佛書林.  
 Jaini, Padmanabh S. 1972. “The *Āloka* of Haribhadra and the *Sāratamā* of Ratnākaraśānti: A comparative Study of the two commentaries of the *Aṣṭasāhasrikā*.” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 35(2): 271–284.

〈キーワード〉 書写, 『八千頌般若経』, 般若経

(北海道武蔵女子短期大学准教授, 博士(文学))